

## 一つの世界を創り上げること

まず、作品を応募してきた全ての方々に感謝申し上げます。今回の戯曲賞の審査員を通じて、戯曲の持つ力について考えさせられました。一つ一つの作品に込められた思い、メッセージ、エネルギー、世界観、そのどれもが自分には描けないものであり、戯曲の可能性の大きさを感じさせていただきました。自分にとって刺激的な選考期間になりました。本当にありがとうございました。

今回、私は特に感じたことは、戯曲の中で語ることの大切さです。

舞台表現では、間や動作、身体表現など、場で直接伝えられる言語的文脈だけではなく、そこに隠された非言語的文脈が存在します。そこでは、演出家が戯曲から感じたものを文章から表現へと変えていき、一つの作品が出来上がります。戯曲は、もちろん舞台を観るわけではなく、その文脈から世界観を想像していきます。そのため、読み進めていくなかで大切だと感じるようになったことは「戯曲だけで一つの作品が出来上がっているか」ということです。

特にト書きについては、それを成し得る要素として大切であると改めて気づくことができたのは大きな発見でした。例えば、岡田隆成さんの「浮遊感」では、冒頭のト書きに「舞台上には生活用品が浮いている」とあります。これだけで、舞台空間への想像力が掻き立てられ、心を掴まれました。もちろん、すべて事細かくト書きで書けば良いというわけではありませんが、自分自身も作品の構成要素として今後大切にしていこうと思います。

また、今回特に多かったのが家族など人間模様を描いた作品です。これらは一つ一つの台詞を重ねるごとに、感情の揺れ動きやすれ違いを強く感じました。特に大賞となった一作品、松本雄貴さんの「首の皮一枚」は、重く緊張状態の続く家族模様が色濃く描かれていると感じました。宗教への信仰の度合いや、家族への思い、それぞれがもつ弱みが巧みに作り込まれていました。白鳥雄介さんの「エゴイズムでつくる本当の弟」では、時間の経過で変化する家族形態とともに、家族の親密度合いや距離感が微細に変化する様を感じることができました。また猫電車さんの「ランジェリーナ」では、結婚間近の二人の近いからこそ許し難さが表現されていました。どの作品も設定と台詞から組み上がっていく、家族の中にある特別な関係性を多彩な表現で描かれていて、人間模様の豊かさを感じました。

最後に、大賞となった一作品、近藤輝一さんの「宇宙家族」では、クシャミで会話するというシーンがあります。宇宙家族の主題の一つである「言葉だけでは伝わりきらない」ということは、まさに言語的ではない挑戦で、こんな表現方法があるのかと心を掴まれました。

「文言だけでは伝わらない、非言語的な要素をいかにして戯曲で表現するか。」ということに、私も今後挑戦していきたいと思います。

ここからは、審査員をした感想になります。お話をお受けしたときから「どうやって作品が決まるのか」というところが悩みでした。最後の投票時、二作品に割れてしまったとき、ここからどうやって決めるべきか話し合いました。一つの賞として、安直に二作品受賞にしまっていていいのかという思いが強くなりましたが、選考委員と話をするなかで「演劇という狭い世界で生きる私たちに少しでも箔をつけたい」という意見に納得しました。これもまだ名前のない若い私達なりの結論で、納得のいく審査に携わることができ、本当に嬉しく思います。

今回、賞を受賞された方はもちろんですが、戯曲を書くすべての皆様とともに、自分もまた作品を生み出し、上演していくことの素晴らしさを伝えていける一員になれるよう努力していきたいと思います。